

HOT TOPIC



YU-AP学生スタッフによる意見交換会開催!

2019年8月7日(水)に、第2回スチューデント・リーダー・プログラム(SLP)【学生企画】『YU-AP動画プロジェクト意見交換会』を開催し、学生・教職員 計13名が参加しました。YU-AP学生スタッフの多くの参加により盛会でした。今回の企画は工学部の学生を中心に作業を進めている動画プロジェクトをテーマにしつつ、動画の場面を見ながら話し合うことで、学生スタッフとしての活動を振り返る機会にもなりました。なお、本企画は山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)が進める正課外教育プログラムの一環として開催しています。

当日は、はじめに作成途中の動画を参加者全員で確認し、良い点だけでなく、より多くの人が見るためにどのような要素があるとよいかについて、特に学生の視点から意見を募り話し合いました。テロップの表示などについて具体的な案が出され、動画のブラッシュアップにつながりました。また、同様の動画作成プロジェクトを行っているCOC+事業の関連動画の一つである、YFL育成プログラム紹介動画を見たことで、同じ学生が自分の技術を活かして活動していることに刺激を受けた様子が見られ、YU-AP学生スタッフ全体の機運の高まりも感じられました。

さらに、動画プロジェクトを通して、他の学生スタッフがどのように大学の教育改善に関わっているのかを知る機会も得られました。今年度までに各自がどのような活動を行ったのかについて説明を行い、本人にとっての活動振り返りだけでなく、新メンバーにとっての今後の目標設定のために有意義な時間を持つことができました。普段会う機会が少ないメンバーも集まることのできたため、それぞれが動画編集のように自分の特技を活かす方法を模索し、将来的なビジョンまで話し合う機会となり、参加した学生の皆さんの充実した表情が印象的でした。



教育は加速する。

Contents

- 巻頭言 …… 2
- AP事業実績の概要 …… 2
- テーマⅠの実績 …… 4
- テーマⅡの実績 …… 5
- イベント紹介 …… 6
- 編集後記 …… 7
- HOT TOPIC …… 8

巻頭言



山口大学 副学長
福田 隆眞

山口大学では、文部科学省大学教育再生加速プログラムの採択(2014年度)を受け、積極的に大学教育改革を進めてまいりました。テーマI「アクティブ・ラーニング」、テーマII「学修成果の可視化」の取り組みを通して、①多様な学生すべてに対する能力育成を最大限支援する、②本学の教育システムを学生および社会に質保証できる、③本事業成果を積極的に情報発信し、我が国の高等教育全体の発展に貢献することを目指しており着実に成果を挙げています。

これらの成果が高く評価され、中間評価では最高の「S評価」を受けました。

2015年度から導入したALポイント認定制度では、当該授業でどの程度アクティブ・ラーニングの活動をしているのか、シラバスに明示されることとなりました。既に、学士課程教育全体でのアクティブ・ラーニング型授業の割合がAP事業の最終目標である70%を超える広がりを見せています。

また、ALポイントや学生の授業満足度をもとにアクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰制度も4年目を迎え、これまでに既に、15科目・38名を選定し表彰を行いました。また、ALベストティーチャー表彰を受けた教員による模擬授業を通したFD・SDワークショップは、大学教員だけでなく、高校教員の参加も多く、非常に好評です。ALベストティーチャーによる授業実践を広く共有することで、全学的な教育改善の議論や組織文化の醸成に資することを目指しています。

さらに、YU CoB CuS、学修到達度調査、学修行動調査といった複数の指標を用いた直接評価・間接評価統合型の学修成果可視化モデルの構築に取り組んできました。そのモデルの一部はすでに学修支援システムに取り入れられており、学生や教員が一目で今の到達度状況を把握できるような仕組みになっています。また、学生に対する学修指導を強化するため、ラーニング・アドバイザー養成講座の実施にも取り組み、学生の成長を支援する体制の一層の充実を図っています。

山口大学・大学教育再生加速プログラムは、事業最終年度を迎え、いよいよ本事業も終盤を迎えました。事業成果を積極的に情報発信するため、「YU-AP News Vol.6」を発刊いたします。今後とも、皆様からの深甚なるご支援を賜りますようお願いいたします。

AP事業 実績の概要



山口大学生 コンピテンシーの 可視化の自立化と 科目によるアセスメント

2019年7月10日(水)・17日(水)の、1年生の授業「知の広場」にて、山口大学の教育理念に基づく『山口大学生コンピテンシー』の達成度を振り返る学習を行いました。



『山口大学生コンピテンシー』は、山口大学教育理念に明記された「山口大学生として身に付けておくべき力(コンピテンシー)」です。『山口大学生コンピテンシー』などの学修達成度について、これまでは外部テストを用いて測定を行っていましたが、本年度より学修行動・学修到達度調査による測定と可視化に切り替え、大学独自として行う環境を整えました。

具体的には、1年次および3年次で実施している学修行動・学修到達度調査において、山口大学生コンピテンシーの4項目の達成度を測る大問について整理を行い、その結果を修学支援システムeYUSDLで表示できるようにしました。eYUSDLの画面には履修情報や学生ポートフォリオなど様々な表示がありますが、『山口大学生コンピテンシー』のページには「驚き」「個性」「出会い」「夢」の4項目のレーダーチャートだけでなく、山口大学教育理念との対応が掲載されており、学生のリフレクションの助けになるように設計されています。

「知の広場」の授業では、この画面を利用しながら、山口大学における学びについて振り返るためのリフレクションワークを行いました。リフレクションの意味について学んだ後、各自で用意してきたPCやスマートフォンで自分の『山口大学生コ



ンピテンシー』の達成度を確認し、ワークシートに書き込みました。自分の強みとなる『山口大学生コンピテンシー』の項目を確認し、今できることだけでなく、更に伸ばすためにはどのような行動が必要になるかについて、対話を重ねながらワークシートを埋めていき、最後には具体的な「行動宣言」として、自分がこれから何をしていくかを決めました。

『山口大学生コンピテンシー』は、大学側がその達成度を把握するだけでなく、学生自身が自分の今のレベルをしっかりと確認する必要があります。山口大学では、今回のような授業によって学生ひとりひとりが自分の力を見つめ、更に伸ばしていけるよう、各種支援の充実を図っていきたく思います。

高大接続・社会接続をテーマに 共育ワークショップ2019 を開催!

2019年3月14日(木)午後、共育ワークショップ2019「多様化社会において必要とされるコンピテンシーとは ～高大接続・社会接続の観点から～」を山口大学学生会館2階会議室(吉田キャンパス)にて開催し、学内外から68名が参加しました。共育ワークショップは、大学教育センターが主催し、大学の教育(共育)について、学生、教職員が一緒になり、様々な観点から語りあい、考えるというコンセプトです。今回は、大学関係者、高等学校関係者、企業・行政関係者が一緒になって、教育について考える場づくりを企画しました。

福田 隆眞 理事・副学長(教育学生担当)より開会挨拶があった後、まず、株式会社ザメディアジョン・リージョナル代表取締役 北尾洋二氏より「『巻き込む力』を育むには～企業家(起業家)からのメッセージ～」と題した基調講演があり、次に、熊本北高等学校教諭 溝上広樹氏より「『探究する力』を育むには～高等学校現場からのメッセージ～」と題した基調講演がありました。前半の最後として、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透より「山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)からのメッセージ」と題し、事業成果報告がありました。

後半のSDGsカードによるワークショップ「2030年多様化社会を見つめ、必要とされるコンピテンシーについて考えてみよう!」では、学校法人 広島城北学園 広島城北中・高等学校教頭 中川 耕治氏、Communication Lab、Beyond words代表 越 希美江氏のファシリテーションのもと、SDGsカードゲームを繰り広げました。高校や企業の研修などでも使用される分かりやすいゲームながら、両氏のレクチャーを含めた進行によって参加者がしっかりとSDGsのコンセプトを理解し、具体的な行動に向けた意識づけができる時間になりました。高校生を含めた多様な参加者がSDGsカードゲームを通して交

流する姿は、本ワークショップの「共育」の理念をまさに表すようであり、今後の大学を考えるステークホルダーの関係の広がりを確信させられました。



2018年度外部評価を活かし、 最終年度の事業展開

本事業では、事業の進捗状況や補助金の執行状況を評価するために、事業内容に精通した大学関係者、高等学校関係者、企業関係者によって構成される「外部評価委員会」を設置しています。

特に、2015年度からは、内部評価と外部評価を連携させながら、評価体制を強化・充実しました。外部評価で受けた講評やコメントを重視し、翌年度の事業計画に最大限活用するPDCAサイクルを構築しています。具体的には、外部評価を受けた翌年度最初のYU-AP事業推進委員会において、外部評価で受けた講評やコメントに関する対応策を作成し、具体的な活動計画を立案するようになりました。このことにより、事業取組の改善・充実に積極的に取り組むことができるようになり、次回の外部評価委員会における事業報告項目が明確化されることとなりました。外部評価を活かしたPDCAサイクルを軸とすることで、事業取組の改善点が明確化し、かつ、改善方策の方向性が具体化され、事業全体の進捗状況が一層可視化されました。

2019年3月25日(月)に開催された「2018年度外部評価委員会」では、事業取組について、中間評価「S評価」を受けて、緻密かつ着実に進められていると評価されたほか、「ALポイントの妥当性の検証」「教学データを活用した学部との対話、教育改善」「DP(ディプロマ・ポリシー)に繋がる教育改善」「YU CoB CuSの成果・検証」、「高大連携による学修成果の対話」「企業・公官庁との対話」など、最終年度に向けた事業全体の到達点を含め、具体的かつ建設的な講評及び指導助言がありました。



テーマIの実績

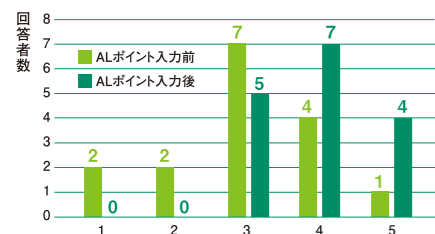
ALポイントの量的分析要点概要

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)事業初期、2014年度末に電子シラバスシステムの改修から始まった、シラバス上に授業の各回でどの程度アクティブ・ラーニング活動を行うかについて入力する「ALポイント認定制度」は、現在では全学的に広まりました。最終年度である今年度はその効果や妥当性を量的観点からの分析を通して検証しています。

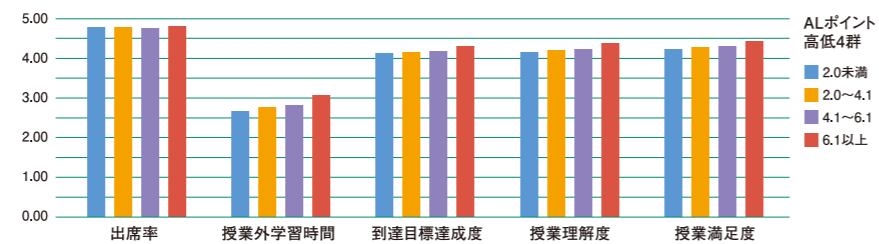
ALベストティーチャー受賞者などを対象とした教員アンケートでは、ALポイントを入力することは教員のアクティブ・ラーニングに対する意識を高めることが分かりました。これはパイロットスタディですが、同アンケートでは、「授業担当教員の不断の授業改善に向けた動機付け、意識啓発の面では大変効果があると感じています」「アクティブ・ラーニングの重要性を教員および学生に気づかせることに大きく貢献したものと思います」といったコメントも集まっており、質的データと合わせた更なる分析が期待されます。

また、2018年度のシラバスデータを対象に、ALポイント高群の授業は学生の授業満足度や目標到達度が高いことが分かりました。単純にALポイント高低2群で有意な差があるだけでなく、6.1ポイント以上というALポイント上位25%の授業については、授業外学修時間・授業の到達目標の達成度、授業の理解度、授業の満足度の全てにおいて他群より高い結果となりました。ALポイントの精度向上とさらなる活用に向けた課題を克服するため、定番化したALベストティーチャーワークショップなどを始めとする、本制度を授業改善に活用する機会を提供することの重要性が改めて見えてきました。

アクティブ・ラーニングに対する意識の高さ(N=16)



ALポイント高低4群の比較(N=75,891)



ALに関する質的分析要点概要

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)事業におけるアクティブ・ラーニング促進では、ALポイントに代表される量的な視点からのアプローチだけでなく、個々の授業における工夫をすくい上げる質的データ収集にも力を入れてきました。

これまでのまとめを行う上で、インタビューで見られたアクティブ・ラーニングの目的の分類について質的分析を行いました。その結果、多様な形態のアクティブ・ラーニングにおいて、特に共通教育科目の特性を踏まえた教授設計上の目的として、(1)幅広い内容を限られた時間で定着させるため、(2)専門教育で必須となる手技を身に付けるため、(3)課題解決に対する積極的な態度を育成するため、(4)人間関係構築など初年次学生の大学生活の支援をするため、という複数の目的が見出されました。本結果はアクティブ・ラーニングの必要性についてのこれまでの議論を補強するだけでなく、本学の特徴となる、特にこれまで注目の薄かった4つ目の目的の対応までを含めて、アクティブ・ラーニングの効果についての更なる議論の必要性を示唆しており、事業終了後も続く授業改善の手がかりの一つとして役立つことが期待されます。



【ALポイント】 Active Learning Point

AL(アクティブ・ラーニング)ポイントとは、ALの6つの形態「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)」「プレゼンテーション」「振り返り」「宿題」に設定されているAL度から算出されます。各科目におけるALポイントをシラバスに明示し、履修の参考にすることで、アクティブ・ラーニングを通じた学生の主体的な学びを促進することを趣旨としています。

テーマIIの実績

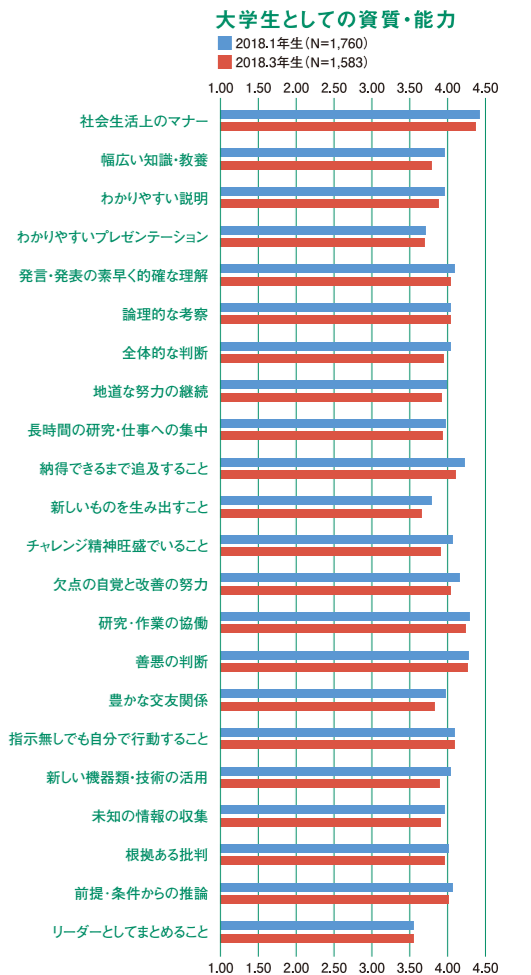
2017年度、2018年度の学修行動調査集計結果概要

2017年度より、山口大学では学修行動調査を独自に用意するアンケート調査に切り替え、外部テストに依らない自立した調査を行ってきました。事業の最終年度にあたる本年度は、この調査結果を集計し、学修成果の可視化資料を学内に報告しました。

成績評価などの直接評価だけでなく、学生自身の回答による学修行動の把握は、大学教育全体のPDCAサイクルのために重要です。大学生としての学修習慣については、1年生でも既に多くの学生が好ましい学修習慣を身に付けていることが分かりました。また、複数の学部で3年生の望ましい学修習慣のポイント上昇が見られており、本学の教育プログラムによる成長を見て取ることができました。

特に学修到達度に関係する、大学生としての資質・能力についての回答からは、本学学生の特徴が明らかになりました。3年生になると自己評価の基準も厳しくなり、点数自体は下降傾向にありますが、その中でも「論理的な考察」「指示無しでも自分で行動すること」「リーダーとしてまとめること」といった項目には自信が見られました。

また、2018年度より調査項目に加えた、授業外学修時間を含む日常生活の時間の使い方に関する質問では、学年・学部による違いが指摘され、特に医学部3年生の学修時間の長さが突出していました。カリキュラムによって異なる学び方を踏まえた上で、授業外学修時間の長い学部についてはアクティブ・ラーニングを含めた授業実践について更なる検証を進めていく必要性を確認しました。



2018年度ラーニング・アドバイザー養成講座

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)事業の一環として、「学生の学びの好循環」に資することのできるラーニング・アドバイザー養成講座を昨年度(2017年度)より企画実施しており、昨年度の好評を受け、今年度は対象を山口大学及び大学リーグやまぐち加盟機関に広げ、研修内容を改善充実して実施しました。今年度は、2回シリーズとして、延べ31名の参加があり、昨年度を超える13名の受講生が修了要件を満たし、「ラーニング・アドバイザー認定証」を授与されました。

第1回(知識理解編)では、千葉大学アカデミックリンクセンター 我妻鉄也 特任助教、同志社大学 学習支援・教育開発センター 浜島幸司 准教授から学習支援の専門職化やラーニング・アドバイザーとしての学習支援の実践や効果について事例紹介をいただき、先進情報を学びました。後半のグループワークセッション「みんなの学習支援の課題について話し合ってみよう!」では、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林透 准教授によるファシリテーションのもと、学習支援者としての「今」を見つめ、学習支援者としての「未来」を思い描き、学習支援の「今」と「未来」を比較して組織レベル・個人レベルで足りないもの、必要なものをリストアップして模造紙にまとめるワークを行い、全体共有、発表を行いました。

第2回(スキル修得編)では、同志社大学 学習支援・教育開発センター 浜島 幸司 准教授のファシリテーションにより、学習支援のために必要なコミュニケーションスキルとして、「リフレーミング」「オープンクエスチョン」「アサーション」の意義を理解しながら、ペアによるロールプレイングを行って、実践的スキルを体得しました。



【直接評価と間接評価】 Direct Assessment & Indirect Assessment

直接評価とは、学生の知識や技能などの表出から学修成果を直接的に評価すること(何ができるか)です。テストやレポート、卒業研究などによる評価がこれに該当します。一方、間接評価とは、学修行動や学修成果についての学生の自己報告から学修成果を間接的に評価すること(何ができるかと思っているか)です。学生調査などのアンケート項目などによる評価がこれに該当します。



Event

【イベント紹介】

スチューデント・リーダー・プログラム(SLP)に大勢の学生が参加!

2019年7月10日(水)に、第15回スチューデント・リーダー・プログラム(SLP)【ラーニングスキル開発】『タイムマネジメント入門講座 ～時間足りない…を生き延びろ!～』を開催し、学生・教職員 計20名が参加しました。今回の講座の目的として、大学生に求められるコンピテンシーの一つとも言えるタイムマネジメントの基礎知識を習得するだけでなく、身近な先輩の体験談を聞きながら、

今後の忙しさを乗り越えるための自信を身に付けてほしいという趣旨説明が行われました。理学部2年生 山口 由貴さんからは、「自分の優先順位をよく考えて、じっくりと悩みながら様々な挑戦をしてほしい」というメッセージが送られ、また、理学部3年生 大亀洋輔さんからは、「自分でやったことを見返してみると、実は友人などに話を聞けば早かったことも多い。1年生だからこそ、人に頼るこ

とも選択肢に入れてほしい」として、自分を振り返りながら時間を管理していく必要性が語られました。

また、2019年6月20日(木)・27日(木)には、第13回・第14回スチューデント・リーダー・プログラム(SLP)【ラーニングスキル開発】『ライティング入門講座 ～レポートの書き方の基本的な作法とコツをつかめ!～』を開催し、学生・教職員 計77名が参加しました。



「学生調査」をテーマにFD・SDワークショップ

2019年7月18日(木)午後、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) FD・SDワークショップ『「学生調査」入門講座～学生調査の見方、活かし方について考える～』を開催し、学生・教職員 計30名が参加しました。

当日は、冒頭、間接評価の代表的手法としての学生調査について説明が行われ、今回のワークショップを通して学生調査についての理解を深めるきっかけを掴み、かつ今後の大学運営・教育改善に活用してほしい旨の話がありました。

その後、学生調査の基本として「設計・分析・活用」の3点に注目したレクチャー&ミニワークが行われました。設計に関しては、特に質問項目の設定について具体的なポイントが共有されました。分析については、統計

分析だけでなく基本的な数値まとめにも意味があることが社会調査の実例を通して語られたのち、山口大学のAP事業で行われた分析を参考例に挙げながら、統計分析の手法についても簡単に説明が行われました。最後に活用に関しては、1度のアンケート調査では限界があることを示しながら、経年比較や質的データと合わせて、学生の成長を多角的に確認し議論していく材料になることが語られました。

ワークショップの最後には、学生調査の設計から活用までを各自の組織の文脈に合わせて体験し、課題を共有するためのロジックモデルに関するワークとして、①学生の現状、②各人の思う理想的な状態③その途中に見ることのできる指標、という3つについて考えました。



山口大学にて、「テーマI・II複合型」選定校意見交換会を開催!

2019年3月14日(木)午前、山口大学大会館1階大講義室(放送大学山口学習センター内)にて、2018年度第2回「テーマI・II複合型」選定校意見交換会が開催されました。当日は、8大学14名の関係者が集まり、各採択校の取組の進捗状況の報告や諸課題の共有・意見交換が行われました。

本意見交換会は、テーマI・II複合型の幹事校である京都光華女子大学短期大学部が主催するものですが、今回は、山口大学が会場を提供する形で行われました。

冒頭、福田 隆真 山口大学理事・副学長(教育学生担当)も会場に駆けつけ、会場提



供校としてのあいさつがあった後、参加大学による報告及び意見交換が行われました。

特に、後半では、「学生の自己評価能力を上げるきっかけや工夫」【ディプロマ・ポリシー(DP)評価等の成績以外の評価指標について、どう学生に関心を持たせるか】といった課題について意見交換が行われました。

本学では、テーマI・II複合型の幹事校である京都光華女子大学短期大学部と連携しながら、最終年度である2019年度に開催される各種企画に参画し、AP事業全体の充実や活性化に引き続き貢献していきます。

AP事業成果発信や情報交流が進む!

YU-AP事業では、学内の教育改革だけでなく、AP事業採択校間の情報交流、さらには、我が国の高等教育全体における質保証、高大接続改革に貢献すべく、積極的な情報発信に努めることを重要な使命と考えています。

本事業採択当初は、国公立の多くの機関から訪問調査を受けたほか、AP採択校が主催するシンポジウム等での基調講演、事例紹介を数多く手掛けてきました。最近では、大学リーグやまぐち加盟の高等教育機関、県内高等学校でのアクティブ・ラーニング型授業設計、学修成果可視化、学修支援など、多様なテーマでの研修講師依頼を毎年度いただくようになっています。

さらに、今年度は、AP事業最終年度ということもあり、これまでの実践成果をまとめ、日本教育工学会をはじめ、各種機会において成果発信を積極的に行うとともに、大学生の学修成果について、採用企業関係者

や高等学校進路担当教員などとの意見交換を行いながら、大学教育に求められるコンピテンシーのチューニングにも取り組んでいます。

国内外や学校種を超えて、YU-AP事業の取組の成果発信と情報交流を益々進めていきます。



Editorial Note

【編集後記】

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)は、アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化の促進、そして、教員・職員・学生が協働するFD・SDワークショップを展開しています。最近では、YU-AP推進室からクリッカーやタブレット機器、アクティブ・ラーニング教室の利用促進について発信しています。2015年度以降、授業での利用実績が継続的にあり、クリッカーやタブレット機器を活用した教員・学生双方での意思疎通を通じた授業は、まさにアクティブ・ラーニングのグッド・プラクティスであるといえるでしょう。また、学生間の意見交換を容易にする学修環境として、可動式の机・椅子が導入されているアクティブ・ラーニング教室が有効に活用されています。



今後の山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)が発信する情報やこれまでの取り組みについては、本事業ホームページにて積極的に発信されています。YU-APに関する最新情報はホームページを是非ご覧ください。URL: <http://www.yuap.oue.yamaguchi-u.ac.jp/>

Staff

【YU-AP 事業推進スタッフ】

林 透
〈大学教育機構大学教育センター 准教授〉
伊藤 千恵美
〈学生支援部教育支援課 事務補佐員〉

- 廣本 明日香 〈人文学部4年〉
- 堀井 さやか 〈人文学部4年〉
- 今徳 凌太 〈経済学部4年〉
- 岡 寛範 〈経済学部4年〉
- 川田 海栄 〈経済学部4年〉
- 増田 雅也 〈国際総合科学部4年〉
- 原 きく乃 〈人文学部3年〉
- 杉本 寛晟 〈経済学部3年〉
- 大亀 洋輔 〈理学部3年〉
- 藤井 聖也 〈工学部3年〉
- 谷崎 絵美里 〈農学部3年〉
- 西谷 泉水 〈農学部3年〉
- 松瀬 可菜子 〈農学部3年〉
- 中村 優紀 〈理学部2年〉
- 山口 由貴 〈理学部2年〉
- 河野 真優 〈人文学部1年〉
- 高橋 真一 〈医学部1年〉

